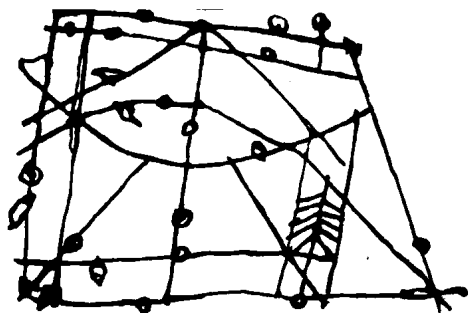


失うべき日

黒井千次



集英社

失うべき日

一九七二年六月十五日 初版発行

一九七二年八月三十一日 一版発行

定価 六八〇円

著者 黒井千次

装幀者 横山迪彦

発行者 陶山巖

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇

郵便番号 一〇一

電話 二六五—六一一一

振替 東京 一五六五三

印刷所 大文堂印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替いたします

夜と果実

5

遊園地から

27

失うべき日

49

失
う
べ
き
日

夜
と
果
実

「層」第十号 昭和四十五年十月

頭に来て、街へ出た。夜だった。

二、三日外へ出ないで部屋にこもっていると、必ずぼくを捉えるあの自分の息のガス中毒にぼくはかかっていた。乾いた口の中で舌が腫れ上がって重かった。シャツからも、カーテンからも、紙屑籠からも、灰皿に溢れた吸殻からも、椅子の肘掛けからも、部屋の中のあらゆるものから、どこか蛋白質の腐臭に似たぼくの匂いが湿っぽく立ちのぼっているようだった。四畳の部屋が口腔で、ぼくはその中の魚の胴にも似て腫れ上がった舌だった。舌は、水分を失ってほとんど粉末に近いものになってしまった唾液にまぶされた黄色い半死の肉だった。坐り続ける椅子の上で、尻の肉のあわさり目がじとじと湿り、体内から押し出された粘膜の爛れにその湿気は塩水のように滲みた。

椅子から立ち上がった時、ぼくは尻にはりついた下着をズボンの上からつまんで剥がさねばならなかった。机の上の電気スタンドを消そうかと思ったが、帰って来た時の暗い部

屋のことを思うとぼくの手はスイッチにのびなかった。南に向いた小さな窓の両側を少しだけあけた。階段を駆け降りた。

街は、五月だというのに異常に蒸し暑かった。闇は汚れた水分を孕んだ雌犬のように生温かく湿っぽかった。手を振りおろせば、切り裂かれた夜気の断面に生じた水滴が音たてて地面に落ちそうだった。街は、部屋より更に湿気に充ちていた。窓をあけて来たことを、ぼくはすぐに後悔しなければならなかった。

湿気のためか、街燈の光はいつもより赤く闇ににじみ、表皮をふくらませた電信柱が鈍い唸りをたてて何本も立っていた。

重い空気は動かなかった。歩くというより、ほとんど水の中を進むように上体を前に倒して、少しでも光の多い方へ、人のいる方へとぼくは自分を押し出して行った。立ち止まるとその場で湿気の中に埋めこまれてしまいそうな恐怖がぼくを包んでいた。光があれば、せめて大気の状態を判断出来るだろう、とぼくは思った。道からちょっと上の方とか、胸のあたりとか、ちょうど顔の高さとかに水溜りがべったりと漂っていそうな感じだった。人が歩いていれば、少なくともそこは安全な場所なのだ、と自分に安心させること

が出来そうだった。

線路ぞいのバス通りに出た時、いつもより一回りは大きくみえる私鉄バスが、ワイパーを動かしながら走って来るのが見えた。なめらかな平面には湿気がすぐ液化して微小の玉を結ぶのかもしれない。バスの中は、がらんとして二、三人の人影しか見られなかった。それでも、大きな車体を船のように揺すってバスが走って行く方向には駅前の赤い信号が見え、果物屋らしい派手な色彩が弾け、それをさえぎって歩く人影が小さな動きとなつて見えていた。あそこまで泳ぎつかねばならないだろう、とぼくは考えた。胸の容量が急に上げ底になったように息がうまく出来なかった。息はねばっこいぼくの口臭にまみれていた。空気が動かないために、今吐いた息が顔の前にはりついたまま、またそれを吸っているのかも知れなかった。

果物屋の前まで来た時、ぼくはポケットをさぐって金をたしかめ、甘夏みかんを一つ買った。それが欲しくはなかったが、ぼくは人と言葉をかわしたかった。皮の厚く、脂性の女の皮膚のような粗い感触の夏みかんがあればそれを食いたかったが、そんな粗野なものは店になかった。紺色のひさし付きの帽子を目深にかぶった若い店員は、最小限の言葉し

か口にしなかった。本当いえば、つり銭をくれる時に咽喉の奥で小さく空気の鳴る音がしただけだった。

それでも、人の数は明らかに多くなっていた。バスの停留所には短い行列が出来ていたし、電車がつくと階段から降りて来る人が切れ目もなく改札口を通るのが見えた。人々は、そこから散って湿気の中にしみこむようにすぐ見えなくなった。

踏切があがると、ぼくはすぐ渡った。電車区があるために始終車両の入れ換え等があり、踏切は減多にあがらないので、これがあがるととにかく渡らないと損だという気がしてしまふのだ。

線路のむこう側は店の数が多くなり、光の量が増大する。道幅も広くなり、一段高い歩道がもうけられている。

湿気は、歩いたために身体の中からもしみ出している。それが首筋の湿疹にしみた。途中で治療を止めると皮膚が厚化して、島のように盛り上がったままなおりませんよ、と皮膚科の医者が言った。治療は、注射と、光線と、塗り薬と、飲み薬なのだが、面倒なのですぐ止めた。医者が言ったとおり、はじめは小さな粒々だった湿疹は少しずつふくれあが

ンドしながら渡った車が、背後から走りぬけていく。

反対側に銀行があった。閉されたその前だけ、光が薄く歩道が広い感じた。そこを、一人の女が駆け始めるのをぼくは見た。頭にネッカチーフをかぶり、手に布をいれた洗面器らしいものを持ったその女が突然走り始めた時、その気配で女に気づいたのだ。濡れた大気の中にぬるりと何かが押し出される感じだった。女の速度は早くなかった。半分遊びに走っているように見えた。声を出したのは、それにつられるように走り出した二人目の女だった。後ろの女は、細いスラックスをはいて手には紙袋をさげていた。声をかけて、前の女を追うように見えた。前の女の足が少し早くなった。その時、三人目の女が走り出していた。傘をさげて白い長靴をはいた女だった。女は、最初の女を追っているのか、二人目の女に追いつこうとしているのかわからなかった。サンダルをつっかけた四人目の女が、片手を前に出しながら傘の女の後を走り出していた。ピンクのパジャマを着た小さな女の子が、サンダルの方の方に手をのびしながら何か叫んで走り始めた。太った黒いズボ

ンの男が女の子の後について馳け出した時、一列縦隊の動きは突然嵩を増し、歩道の上に何かはつきりと出現したかのようだった。小さな下駄屋の主人が、店先いっぱいにつるしたサンダルの間から首を出した。次の瞬間、主人は前掛けをつけたまま太った男の後ろを走り始めていた。ほうじ茶をぐるぐるまわしている店からとび出した二人の女の子が、下駄屋の後を走った。金網の駐車場の脇から跳び出した白い犬が、お茶屋の女の後から怯えたように尻尾を下げて歩道を走り始めていた。その時、ぼくのいる歩道の側からとび出した一人の老人が車道を斜めに渡って犬の後を追った。それを合図のように、ぼくの立つ側の歩道から人々がどっと車道を押し渡って老人の後を走り出していた。踏切の警報機が湿った音で鳴り始めた。伸び上がってみると、先頭の洗面器をかかえた女はもう踏切を渡り切ったようだった。ぼくのまわりを人々が風を巻いて走り抜けていくのがわかった。どこにこんなに人がいたかと思う程、次から次へと男や女が車道を横切り、踏切にむけて走り出していた。踏切の遮断機が高い所からゆっくり降りて来るのが見えた。叫び声があり、黄色と黒に塗られた横長い遮断機が中空でとまるのが見えた。電車の警笛が大きな重々しさで二、三度たて続けに鳴るのがきこえた。揺れていた遮断機が再び降り始め、その下

で激しい叫びがまたおこった。ぼくの立つ側の歩道でも、既に人々は踏切の方にむけて走り出していた。人々は決して口を開かずに、ただクックッと咽喉を苦しげに鳴らして走っていた。

なんですか？

走りだそうとしてズボンの裾を靴下の中にあわてて押しこんでいる一人の男にぼくはきいた。

わかっていりや、行きはしませんよ。

男は片足で立ってよろけながら、次の瞬間には片足とびのまま走り出していた。

誰かがぼくの肩にぶつかった。ふりむこうとした時、腿を押された。背中に入った。のけぞった時には、もうぼくは走り始めていたのだ。走り出すと、少しは風が顔に当るのがわかった。踏切まではすぐだった。踏切番が手持のスピーカーで叫んでいたが、その声は尾の長い鳥の声に似ていた。人々は遮断機の下をはいくぐっては横幅いっぱいひろがり、走りにくい枕木の上を一気に駆け抜けようとしていた。紙にくるんだ花を脇にかかえた女の子が、花鋏で一心に遮断機のワイヤロープを切ろうとしているのが見えた。遮断機をく

ぐって踏切の中を走り出した時、意外な近くにとまっている電車にぼくは驚いた。それは二階建の家程の高さで、その頂上から白く眩しい光を放っていた。その前を駆け抜ける時、電車はふざけたような警笛を長く長くふるわせて鳴らした。身体の高い動物が鼻を鳴らしたようだった。ふりむくと歩道に溢れた人達が今は車道までも埋めて後から後から踏切の中めがけて押しよせていた。

むこう側の遮断機は、すでに道の上に潰された細長い生物のようになって人々の足に踏まれていた。子供の手をひいた中年の女が、脇を走りぬけながら甲高い声で子供を叱っているのがきこえたが、何を叱っているのかまではわからなかった。子供の顔にびっしりと小さな水滴がはりついているのが、油を塗った仮面でもかぶっているように見えた。走り出してみると、歩いている時より息が楽になっていることに気づいた。弾む息のために、かえって多量の空気が胸に吸いこまれるせいかもしれない。走り出して本当に良かった、とぼくは人々の肩の間で思った。そのせいか、ぼくは少しずつ快活になって来るようだった。先刻「甘夏みかん」を買った果物屋の前を通過する時、ぼくは黄金色の果実を高々と頭の上にかかげてみせたが、店の中はがらんとして人気もなくなだ並べられた果